

雨水利用システム

技術概要

地区に降る雨水を貯留利用するシステムを“雨水利用システム”という。各戸で 200 ㍓程度のタンクを用いる、防火散水用として街路にタンクを設置する、また、集会場等の拠点的施設で 30m³程度の貯留槽を設置し、非常用生活防水として利用する等が考えられる。また、建物屋上面等を利用して集水した雨水を簡易処理し、トイレ用水等に使用することも考えられる。

新都市での導入効果について

節水型の新都市を建設することにより、地域に発生する新規の水需要を抑制する効果がある。また、地区内の自然資源を活用することになり、居住者が楽しむきっかけとなり、自然との共生を実感できる意味でも有効と言える。また、計画的に地区内での面的導入に取り組むことで、流出抑制効果が期待でき、雨水調整池の容量削減、有効宅地面積の増加につなげることも期待できる。

導入における課題（ 対応策 ）

雨水の集水面を確保することが課題。

建物単位で雨水利用をする場合は、床面積に対する屋根面積比率の高い、戸建住宅屋根面等を活用する。また透水性舗装等と組み合わせることにより、道路面を集水面とし、雨水調整地と組み合わせた大規模システムを導入することも考えられる。

その他（ 導入状況・技術開発等動向・将来見込み等 ）

雨水利用のために、独立の空のタンクを建設するよりも、コンクリート基礎工事を簡素化できる砕石空隙貯留や、プラスチック性雨水貯留材を用いた工法が開発採用されている。砕石空隙貯留を用いた例としては、旧住都公団豊四季第 2 団地において、太陽電池をポンプとして用いた散水等を組み合わせたシステムがある。（ 下図 ）

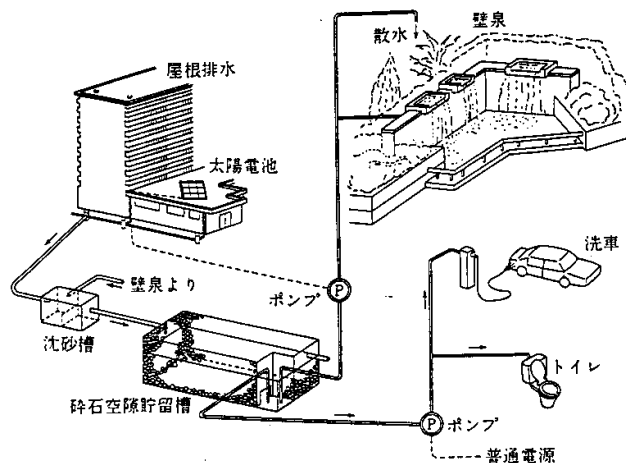


図 旧住都公団豊四季第 2 団地の砕石空隙貯留等による
雨水・太陽エネルギー利用システム概要